



TITLE:

ホームス氏を訪ふの記

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. ホームス氏を訪ふの記. 天界 1924, 4(47): 437-438

ISSUE DATE:

1924-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160188>

RIGHT:

あることを算出した。最近にも、學者たちは或る重要な學問上の發見をしたのであり、將來も亦驚くべき天文發見が有りさうに思はれる。それでも、今後百二十世紀を経た時代の星空を觀察する未來の天文家たちに言はせれば、今日吾人がやつてゐる天文上の發見や研究は、恐らくは、一萬二千年前に哀れな穴居生活をしてゐた星覗き者のやつた發見や研究のことを吾人が見るのと同じ様に見るであらう。

(一九二四・六・五、米國ハーグード大學にて山本一清譯)

ホームズ氏を訪ふの記

山本 一 清

C N ホームズ (Charles Never Holmes) 氏は、少なくとも、其の名だけは世界の天文家の間に廣く知られてゐます。私はゴビユラー・アストロノミ (Popular Astronomy 米國の天文雜誌) に常々表はれる天文詩や美しい文章の記者として此の人の名を、よほど以前から知つてゐました。しかし昨秋ケンブリヂに來るまではホームズ氏が何所に住んでゐられるのかは好く知りませんでした。

ところが、ハーグード天文臺に來て間も無い或る日、平生愛讀するトランスクリプト (ボストンの日刊新聞) の或るページを見ますと「冬の星々」を題した短かい一文がホームズ氏の名で出てゐるではありませんか！ それで私は氏が此の近くに住んでゐる人であることを知り大變嬉しく思ひました。しかし不思議なことに、當天文臺の中で、ホ

ームズ氏の名は皆知つてゐても、誰も會つた人はいと言ひます。そこで氏の精しい住所を知ることが出來ず、少々弱りましたが、其の中に、また、トランスクリプト紙上に、同氏の春の星座に關する文が載り其の終りに、ニウトン市アーリントン街さういふ字を見付けました。之れで大に力を得、早速、

「御目にかゝりたいものです」

さういふ手紙を書き送りましたところが、直ぐ、丁寧な返事が參り、又ついでにホームズ夫人から英子へ宛て、

「どうぞ御一所に御出で下さい。ステシヨンまで御迎ひに參りますから」

さういふ音信がありました。——日は「來る六月四日」でありました。

さて、六月四日の水曜日、空は曇りでしたが、約の如く、二人で午後三時二十分ボストン南停車場から汽車に乗りましたが、距離は僅か十哩ばかりの所ですから、まもなくニウトン着。車から下りて見るこ

背の高い笑顔の婦人が、

「ヤマモト様たちですか？ 私はミセス・ホームズです。」

と言つて迎えて下さるのです。

「ミスター・ホームズは脚が悪いのですから、宅に御待ちしてゐます。どうぞ此の車に御乗り下さい」

そこで、きれいな自働車に乗せられ、夫人自ら車を禦して、アーリントン街に案内されました。ニウTONの街路は木立や庭園が多く、それが今さきまで降つてゐた小雨にぬれて、美しく洗はれた装ひがでした。白や紫のライラックの花が咲いてゐるホームズ氏の家の入口に車に着きますと、ドアが開いて、中からは杖にすがつた主人ホームズ氏が

現はれました。背は低くありますが、全く氣品のある顔付に、愛嬌をたへて、氏は初對面の挨拶の手をさし延べられるのでした。

それから、直ぐ應接の廣間に通されましたが、二言三言話が進んだ後、

「書齋の方が好いでせう」

と言はれるので、主客は共々二階の明るい室に移りました。南向きの此の室は、窓掛けも一ぱいに開けて、いかにも押つ開いた氣分。そこに手頃の机を置いて、十數冊の書物と、書簡紙やペン若干と、一臺のタイプライターとがありました。後ろには可なり大きい書架、壁には大小幾つかの肖像寫眞、又、天井には籠アンテナがV形に張られて、其の一端から棚上のレデオ受話器にワイヤが続いてゐます。

「レデオを御好きですか？」

と聞く。

「えゝ、單管器ですが、これでも好く聞こえます。シカゴやデデンポートあたりも時々聞えてますよ」

いかにも屈托が無さそう。

それから、一通、壁にかゝつてゐる寫眞の説明があつたり、窓からボストン灣が見えると言つて景色を見せられたりしました。英子は夫人と向ひ合つて、しきりに

「アメリカの食物は御好きですか？家の住み心地は？」

など、聞かれてゐます。

私は持つて來た「天界」四月號をホームズ氏に贈つて、いろ／＼と日本の事を話したりしましたが、氏は日本文を見て

「之れが讀めれば好いですにホ」

などと愛嬌を言はれます。それから、次に、こちらから聞くにまかせ

て、氏は自己の若い時からの事な、色々話されました。精しいことは略しますが、要するに、氏は一八九六年にハーバード大學を卒業されたのですが、在學中は神學を主として、尙、化學だの物理だの地質だのと言つたやうなサイエンスをも勉強したと言はれます。天文學は別に大學時代に勉強したものではなく、卒業後、自分で好むがまゝに獨り書物など讀んだに過ぎないが、

「之から、私は天文を詩的に見るのが好きです」

などと言つてゐられました。之れで見ると、氏は廣い意味の文學者であつて、しかも現今のサイエンスをへびさうり天文學のみと言はすゝ一般に神生活の資料としてゐられるらしいです。家は裕福らしく、それに身體が不自由なので、今は之れを決つた職業は持つてゐられません。只、日常は暇にまかせて、詩文を作り、之れを新聞や雜誌に投稿してゐられるといふ至つて存氣な生活ぶりです。かうした人の常として、自分が今までに書いた詩文を澤山スクラップブックに張り付けて、保存して樂んでゐられるらしく、私に其うしたものを多く見せてくれました。

夕方にもなつたので、夫人の言ひ出して、ホームズ夫妻と吾々二人と總勢四人で自動車に乗り、夫人自らは又車の禦者として、一通りニウトンの街々を巡り、それからコンモンエルス街をボストンに行つて有名な亞州公司以て支那食を頂き、それから又暫くチャルス河畔をトライグした後、送られて、私共はケンブリヂに歸りました。

全く世間ばなれのした、呑氣な、又、愉快な半日でありました。

前掲の譯文は今年四月「天然」といふ雜誌に載せられたホームズ氏の原文を、許しを得て譯したものであります。(一九二四・六・五。ハーバード大學天文臺にて)